

読売歌壇

小池 光選

ぬるき水蛇口より出す アメリカのクラスター
爆弾供与を知る日 茅ヶ崎市 山内とみ子

【評】ロシアは悪で、ウクライナは善。そう
いう単純な見方をしがちだが、現実はずっと
複雑だろう。悪名高きクラスター爆弾をウク
ライナが使う。蛇口から出る水が、ぬるい。
「チボ一家」と共に生きてた数週間八十五歳の
夏は過ぎゆく 加茂市 田代 旅子

【評】青春文学の傑作『チボ一家の人々』を
数週間かけて、八十五歳の夏に全編読み通し
たのである。すばらしい。こういう老いのあ
りかたにふかく敬意を表する。
青森に三五七八戸あり岩手に二九戸ありけ
り 小川市 小林 浦波

【評】三戸、五戸…はサンノヘ、ゴノヘと
読む。地名だけを並べた、まこと「無意味」
な歌だが妙におもしろい。こういう歌もある。
うつつとも夢ともつかず聴きてをり白石加代子
の「百物語」 東大阪市 山本 隆

大谷のホームラン二本目知らざりき猫を抱きて
厚寝してをり 鹿嶋市 加津牟根夫
喜寿過ぎて初ヘルメットに照れながらスパー
までの自転車漕ぎぬ 所沢市 小室 佳久
総入歯に言葉がはつきりしないよはつきり物
を言わぬ友言つ 日南市 宮田 隆雄

厚寝タイム 東大阪市 池田 敏子
ささやかで束の間なれど安らぎぬ鳩と並んで歩
いた時間 東京都 榎本 セツ
夏雲のごとき量感失せたと補聴器通しマール
ーを聴く 枚方市 秋岡 実

栗木 京子選

高地にて鍛えたみたいいな速さなりマスク外して
駅へ走れば 静岡市 柴田 和彦

【評】マスクを外すと呼吸が楽になった。と
りわけ走っているときは心身ともに軽やかに
なり、まるでアスリートの気分。「高地にて
鍛えたみたいいな」の比喩が冴えている。
八倍の声が戻って来る列の擦れ違つ子ら朝の
「おはよう」 美濃加茂市 近藤 祐司

【評】八人で集団登校する子たちである。
作者の声に込めて一人一人が「おはよう」と
挨拶しながら擦れ違つ。「八人」でなく「八
倍」に子らと触れ合う喜びが感じられる。
背をまらめ杖にたよるもオレンジの水玉とほし
たブラウスを買う 高槻市 佐々木文子

【評】オレンジ色の水玉模様のブラウス。「ま
らめ」「たよる」の動詞が、下句で「とほし
た」「買う」と能動的になるのが素敵だ。
志ん生の「祇園祭」を聴きあつた鱧食ふ京の暑
さ思ひて 稲城市 山口 佳紀

毛穴から染みこころでる蟬の声 切れ目に風の
通り抜けたら 龍ヶ崎市 寺山 昭彦
この部屋の灯りがわりのパソコンの四角い窓か
ら下界をみてる ぶじみ野市 雨雨雨汰
梅雨晴れの桃の夷頭上へ色づき光をまとう
ぶ毛愛しや 鳥取県 小谷真由美
店先の大玉レタス二個百円農家と思うため息
が出る 前橋市 西村 晃
火葬場の煙突くぐり父は逝くおもしろかった
と手を振りながら 長野市 遠藤ゆり子
賜りし祝いの傘の使い時 雨の降る日はもった
いなくて 木津川市 永岡 操子

俵 万智選

教科書に腕立て伏せをさせながら詩の風にきみ
は眠りつつける 川崎市 からすまあ

【評】詩のページを開いたまま、顔か胸の上
に山型に教科書を伏せているのだろう。腕立
て伏せの比喩が素晴らしい。寝息とともに上
下する感じも伝わってくる。
有明のダイヤモンドの街灯をふたり見おろす夏
はあけほの 可児市 阿坂 れい

【評】有明という古めかしい語を枕詞のよ
うにダイヤモンドへ続けるところが面白い。
二人で共有した夜から朝への時間も、輝いて
いる。枕草子に対抗するような結句が粋だ。
彼の吹くトランペットの上達は公園にいるみん
なの願ひ 東京都 富井高志

【評】彼の人柄もあるかもしれないが、騒音
扱いされていないところがいい。「コミュニテ
ィの温かさに、読者としても加わりたくなる。
水道の蛇口の奥のその先の琵琶湖の魚はお元氣
ですか 守口市 小杉ななさん

放課後とう時間まぶしく傘ささぬひとりふたり
が駆けてゆきたり 大和郡山市 大津 穂波
一年に一度しかとは思わぬ一度は会える友人
である 堺市 一條 智美
花でさえ育てたことなき吾の中で球根のように
映る胎嚢 燕市 田巻由美子
多忙なる故か朝顔配達人けさはまとめて十輪咲
かす 青梅市 諸井 未男
まな板の上でオクラを転がして夏の産毛を取り
払ひたり 千葉市 小金森まき
目の覚めてわがわがわれない時の小鳥の声の
透きとおる朝 仙台市 小野寺寿子

黒瀬 珂瀾選

触るわが唇吸はれ返されんほほつき色の輪島
の椀に 長野市 原田 浩生

【評】最高級の塗り椀はその触れ心地も格別
と言つ。輪島塗の逸品で吸い物を味わうひと
とき、その官能的な感触を楽しむ贅沢さ。「ほ
ほつき色」の朱塗りが実に鮮やかです。
街越えて遠くに見ゆる山里に住める一人も歌の
ライバル 吹田市 鈴木 基充

【評】特に会うことは無くとも、存在を意識
するライバルがどこかにいること。それは人
生の張り合いにもなるでしょう。短歌がもた
らす人間関係の在り方のひとつと言えます。
隊列をなして侵攻する兵の最後尾の兵はまだ
見えず 大阪府 平山 澄恵

【評】報道で見た進軍の景色であり、かつ、
終結が全く見えないウクライナ戦争そのもの
の比喩とも読みました。最後尾に早く去れ。
母の靴ぼつんと一足残りにいていよいよ生家は無
人となりぬ 神戸市 新美ゆかり

駅前の上りライプに足を止め友の葬儀にわざと
遅れる 宇治市 浜岡 学
可部線の三段映の駅に降りたので食つたかけ
そば言ひ 守谷市 久保田洋二
少国民ワレラ国民学校へ歩調トリニキ背囊ユラ
セ 東大和市 板坂 寿一
年寄りの置かれた位置を考へて盆が来るので庭
の草とる 小美玉市 松山 光
長男と夢に屋台で飲んだくれ私はぬ金のつりを
貰ひぬ 宗像市 巻 桔梗
K君ハコロナで途切れた二人きりの同窓会を再
開しようか 枚方市 林 孝夫

次回は15日(火)
掲載予定

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、
〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから。右の影絵はさるすべり